

平成30年度 会長あいさつ

日本重複障害教育研究会 会長 猪瀬義明

本会の目的の一つは、共生社会の実現です。心身共に全般的なハンディキャップがあり、日常的に継続的にサポートが必要な人たち、いわゆる重度重複障害者の人々を含んだ共生社会の実現です。その人たちが一人でも欠けたら、それは、全ての人々を包み込んだインクルーシブな真の意味の共生社会ではないと考えています。

この無告の人たちは、いつの世でも政治的にも、政策的にも人々の最後尾に位置づけられてきました。本会は、現在までの在り方を乗り越え、この人たちを共生社会形成の最前線に位置づけ、個別的な現存において生命を享受できかつ共同で生活できるような社会の実現を目指していきます。そのような真の意味の共生社会の実現を目指していきます。

いわゆる重度重複障害者が「社会的に自立するには、七人の仲人がいる。」といわれてきました。それは、家族であり、ご近所組であり、民生（児童）委員の人であったり、各市町村の福祉課・社会福祉協議会や地域生活支援センター等々の福祉機関の人たちであったり、かかりつけの医者であったり、働く（生活する）場の人々であったり、卒業した学校であったりします。サポートの程度が多くなればなるほど、仲人の数は、多くなっていくことは、言うまでもありません。我々は、ここに地域の共生社会をデザインする多職種連携の原型を見ることができます。これらの人々や機関等が連携し合い、協力して生活をサポートし合わねば、重度重複障害者の人たちは、親亡き後の生活どころか生存も叶わなくなってしまうと思われまふ。この人々の生存や生活や自立そして社会参加を可能にするには、サポートし合う人々や機関において誰が、何時、どのような場で、何を、どのような方法で、結び目を創っていくか、どのような繋がり方を求めていくかが重要です。

本会は、その結び目や繋がり方の試みとして、3つの話題提供をします。

①「インクルーシブ教育に向けての梅田小学校や葛飾区の実践を通して」

阿部健策氏（葛飾区梅田小学校校長）

②「福祉界から見た震災復興のための多職種連携について」

北村弥生氏（国立障害者リハビリテーションセンター開発研究室長）

③「奈良北団地における地域共生のための多職種連携について」

西井和也氏（アビリティーズ奈良北みまもりサービス事業所所長）

これらの話題提供が「地域の共生社会をデザインする多職種連携」の結び目の在り方・繋がり方の再考やその深化の一助になればと思います。

最後に、中世「小栗判官（毒を盛られて癩病となる）が治癒のため土車に乗って熊野の峰の湯に向かいます。その時、藤沢の遊行上人は、人々が土車は引きやすいように『この者を一引き引いたは、千僧供養、二引き引いたは、万僧供養、』という胸札を立てます。この胸札が結び目となり、人々は群れ、土車の綱に繋がり、彼を峰の湯に引き届けた。」

この故事に因み、無告の人々（重度重複障害者等）が「小栗判官が胸札のお蔭で峰の湯に無事辿りつけた」ように、このフォーラムが「かの胸札」のような役割を果たし「共生社会」実現のための人々の結び目となり、繋がり合う契機となればと考えています。